

森山至貴 著

『「ゲイコミュニティ」の社会学』

(勁草書房, 2012年, A5判, 276頁, 4,500円+税)

杉浦 郁子

(和光大学現代人間学部准教授)

本書は、「〈わたしたち〉でいることの困難と技法」(終章のタイトル)を社会学的に記述するものである。本書で「〈わたしたち〉でいること」とは、すなわち、「ゲイ男性の集合性を維持すること」である。その困難の現代の特徴を論じ、にもかかわらず、最低限の集合性を維持する技法がゲイ男性たちの実践に見られることが明らかにされている。

本書がまず注目するのは、日本に住むゲイ男性たちに共有されている「新宿2丁目」的なものや「ゲイコミュニティ」的なものへの「ついていけなさ」である。ゲイ男性たちは、なんらかの集合性の存在を信憑したうえで、それへの心理的距離や疎外感をあわせもっているという。この「ついていけなさ」を「どんなゲイ男性でも多かれ少なかれ」「抱えているとの想定に賭け」(13頁)、その発生原因をゲイ男性の「つながり」のあり方から説明しようとするのが、本書の目的である。なお、「つながり」は、本書全体を貫くキーワードであり、「ゲイ男性・バイセクシュアル男性の集合、あるいはその相互行為の総称」(18頁)である。

第I部「つながりの編成」では、ゲイ男性のつながり方の歴史的变化が大まかに示される。1920年代に通俗性欲学の知を内面化した男性同性愛者が誕生すると、たんなる「同性」ではなく、「男性同性愛者というアイデンティティの所有者」との性的接触が欲望されるようになったという。この相手探しを可能にするものとして、アイデンティティ所有者の「総体的なつながり」(ゲイ男性の集合性)が同時に希求されるようになった。著者は、特定の男性同性愛者との排他的な関係を「特権的な他者とのつながり」と呼び、それを可能にするという意義を「総体的なつながり」が有することで2種類の「つながり」が不可分に結びついていたのが、1920年代の「つながり」の特徴だと分析する。

次に、1920年代との対比において、現在(90年代中盤以降)が論じられる。ハッテン場、ゲイバー、ゲイ雑誌の観察から示されるのは、ハッテン場は「特権的な他者とのつながり」の装置へと純化し、ゲイバーやゲイ雑誌はそれとは無関連の「総体的なつながり」の装置へと純化したということである。インターネットというテクノロジーも、2種類の「つながり」の分化を進めた。「総体的なつながりが特権的な他者とのつながりのためのものでもある」(113頁)という1920年代のリアリティはもはや成立せず、ゲイ男性たちは両者をまったく別物として体験してい

る。このとき、一方のつながりを求める者は他方のつながりの様態の「混入」を「違和感」や「強制」として感受する。両者の切断そのものが、多くのゲイ男性に「ついていけなさ」を感じさせる要因になっている、というのが著者の分析である。

ところで、異性愛者の場合、特権的な他者とのつながりの実現可能性は、婚姻制度などのかたちで「全体社会」（総体的なつながり）の「例外事態」として承認されることで、担保されている。しかし、ゲイ男性の場合、両者の切断という固有の状況がそれを許さないことが述べられ、第Ⅱ部「つながりの隘路」において、その切断のありようが言説分析により論証される。

第Ⅱ部で扱われる言説は、「カミングアウト」と「ゲイライフ」に関するものであり、1990年代と2000年代の違いにフォーカスした分析がなされている。そこで明らかにされるのは、2000年代に入り、①総体的なつながりを通じて特権的な他者とつながることが想定されなくなったうえに（4章）、②そもそも総体的なつながり自体が成り立ちにくくなったことである（5章）。

第Ⅲ部では、こうした2000年代的な状況のなかで、それでも「つながっていきざるをえないゲイ男性」（244頁）が生み出した「つながりの技法」が、インタビューデータを用いて記述される。技法として抽出されているのは、①「こっち（の世界）」という、その内実が空疎な言葉を使うことで、規範性を弱めつつ総体的なつながりを立ち上げる相互行為的な実践（6章）や、②「タチ／ネコ」という曖昧な用語を利用することで、総体的なつながりへの同化圧力を減じつつ、特権的な他者とのつながりを築こうとする実践（7章）である。

評者は、ゲイ男性の集合性を、政治的なプロジェクトによらず、また誰かを疎外することなく創出するという相互行為実践に着目した第Ⅲ部を評価している。また、第Ⅰ部の着眼や第Ⅱ部の知見はいずれも独創的であるが、いかんせん、実証が弱い。検討された言説の少なさや偏りが目立つため、示された歴史を「事実」として受け入れるのに躊躇する。

とくに本書の問題意識を示し、ついで2種類の「つながり」の切断を示す第Ⅰ部の歴史記述では、経験的データを堅実に積み上げる作業が必要だったのではないかと例えば、冒頭では、ゲイ男性の集合性に対する「ついていけなさ」が現在広く分けもたれていることが述べられているが、それがデータの力ではなく、論理の力で示されていく。つまり、「ついていけなさ」の構造的な発生を論理的に説明しうることをもって「ついていけなさ」の広範な存在を裏づける、という論じ方に見えるのである。その他の歴史記述にも、経験的に示された知見というより、論理的に導出された仮説のように読める箇所がある。

丹念な資料収集が課題と思われたが、とはいえ、問題意識から結論にいたるまで、発想力豊かな内容である。斬新な視点で「ゲイコミュニティ」を論じた研究として、本書を薦めたい。